

薩摩守忠度は、いづくよりや帰ら<sup>①</sup>れたりけん、侍五騎、童一人、わが身ともに七騎取つて返し、

五条三位俊成卿の宿所に<sup>②</sup>おはして見給へば、門戸を閉ぢて開かず。「忠度。」と名のり<sup>③</sup>給へば、

「落人帰り来たり。」とて、その内騒ぎ合へり。薩摩守馬より下り、みづから高らかにのたまひけるは、

「別の子細候はず。三位殿に<sup>④</sup>申すべきことあつて、忠度が帰り参つて候ふ。門を開かれずとも、この

際まで立ち寄ら<sup>⑤</sup>せ<sup>⑥</sup>給へ。」とのたまへば、俊成卿、「さることあるらん。その人ならば苦しかるまじ。

入れ<sup>⑦</sup>申せ。」とて、門を開けて対面あり。事の体、何となうあはれなり。

薩摩守のたまひけるは、「年ごろ申し承つてのち、おろかならぬ御事に思ひ参らせ候へども、この

二、三年は、京都の騒ぎ、国々の乱れ、しかしながら当家の身の上の事に候ふ間、疎略を存せずといへ

ども常に参り寄ることも候はず。君すでに都を出で<sup>⑧</sup>させ<sup>⑨</sup>給ひぬ。一門の運命はや尽き<sup>⑩</sup>候ひぬ。撰集のあ

るべき由<sup>⑪</sup>承り候ひしかば、生涯の面目に、一首なりとも御恩をかうぶらうど存じて候ひしに、やがて世の

乱れ出でて来て、その沙汰なく候ふ条、ただ一身の嘆きと存ずる候ふ。世静まり候ひなば、勅撰の御沙汰

候はんずらん。これに候ふ卷物のうちに、さりぬべきもの候はば、一首なりとも御恩をかうぶつて、草

の陰にてもうれしと存じ候はば、遠き御守りでこそ候はんずれ。」とて、日ごろ詠み置か<sup>⑫</sup>れたる歌ども

の中に、秀歌とおぼしきを百余首書き集められたる卷物を、今はとてうつ立たれける時、これを取つて

持たれたりしが、鎧の引き合はせより取り出でて、俊成卿に<sup>⑬</sup>奉る。

三位これを開けて見て、「かかる忘れ形見を賜り置き候ひぬる上は、ゆめゆめ疎略を存ずまじう候ふ。

御疑ひあるべからず。さてもただ今の御渡りこそ、情けもすぐれて深う、あはれもことに思ひ知られて、感涙おさへがたう候へ。」と<sup>⑭</sup>のたまへば、薩摩守喜んで、「今は西海の波の底に沈まば沈め、山野にかばねをさらさばさらせ。浮き世に思ひ置くこと候はず。さらばいとま申して。」とて、馬にうち乗り、甲の緒を締め、西をさいてぞ歩ませ<sup>⑮</sup>給ふ。三位後ろをはるかに見送つて、立た<sup>⑯</sup>れたれば、忠度の声とおぼしくて、「前途程遠し、思ひを雁山の夕べの雲に馳す。」と、高らかに口ずさみ<sup>⑰</sup>給へば、俊成卿、いとど名残惜しうおぼえて、涙をおさへてぞ入り<sup>⑱</sup>給ふ。

そののち、世静まつて『千載集』を撰ぜられけるに、忠度のありしありさま、言ひ置きし言の葉、今さら思ひ出でてあはれなりければ、かの巻物のうちに、さりぬべき歌いくらもありけれども、勅勘の人なれば、名字をばあらはされず、「故郷の花」といふ題にて詠ま<sup>⑲</sup>れたりける歌一首ぞ、

「よみ人しらず」と入れ<sup>⑳</sup>られける。

さざなみや志賀の都は荒れにしを昔ながらの山桜かな

その身、朝敵となりにし上は、子細に及ばずと言ひながら、うらめしかりしことどもなり。